



かがわ遠隔医療ネットワークK-MIX ③

—電子処方せんネットワークシステム開発のねらいと今後の課題—

徳島文理大学 香川薬学部 教授 飯原なおみ

「K-MIX: Kagawa Medical Internet eXchange: かがわ遠隔医療ネットワーク」の最終回は、機能拡張として、現在、実証事業を行っている「電子処方せんネットワークシステム」について説明する。

「電子処方せんネットワークシステム」は、院外処方せんを単に電子化するだけではなく、地域におけるチーム医療の推進と薬害回避を目指して開発された。本システムは病院と保険薬局とをデータセンターサーバーを介して双方向に結ぶもので(図)、インターネットにより、病院から保険薬局へは、処方に加えて、病名、検査情報、医師コメントを伝送し、保険薬局から病院へは、処方変更内容、後発医薬品名、副作用状況、薬剤師コメントを伝送するものである。保険薬局の薬剤師は、データセンターサーバーに保存された情報をHPKI(Healthcare Public Key

Infrastructure)ユーザ認証を用いて確認し、病院の医師や薬剤師らは、保険薬局からのフィードバック情報を電子カルテ端末で確認する。

保険薬局は、患者が日々の診療で訪れる「しめくり」の場所である。当然、保険薬局の薬剤師と病院、診療所のスタッフとは、患者が抱える課題について情報交換する素地がなければならない。ところが、現行では保険薬局に届く情報は処方情報だけであるため、保険薬局の薬剤師は正確な病名を知らずに服薬指導を行っているのが実情で、よほど確信が持てる場合を除いて、疑った副作用を医師に確認できずにいる。また、疑義照会後の処方変更内容などはFAXで病院、診療所に返送されるが、電子カルテ化が進む病院・診療所では返送情報が十分活用されていない実態もある。

チーム医療においては、関連する医療スタッフ間で、目的と情報を共有することが必要とされており(厚生労働省「チーム医療の推進について」平成22年3月19日)、「電子処方せんネットワークシステム」は保険薬局を含めて地域におけるチーム医療を展開する上で不可欠である。また、保険薬局の薬剤師が病名や検査情報を知ることができれば、適切に患者インタビューが行えて、副作用の発現状況を精度よく確認できる。

実証事業は、平成22年11月末から香川大学医学部附属病院と香川県内の約40保険薬局とで開始した。いまだ構築したシステムの有用性を評価するには至っていないが、システムを利用した患者のなかには「医師と薬剤師とが自分のことをよく知ってくれるので見守ってくれていると感じる」とチーム医療を実感する患者が多い。また、システムを利用した薬剤師からは、「病名や既往歴、検査値などがわかるので、患者への生活指導など一歩踏み込んだアドバイスができる」「患者との信頼関係が生まれ、患者の期待に応えるというプレッシャーとともに強い責任感が生まれた」という感想(さくら調剤薬局 今坂玲子先生)に加えて「検査値などについては、医師と薬剤師で解釈に食い違いがないよう慎重に扱わなければならない」といった課題(なの花薬局松原店 船戸伸幸先生)もいただいている。

今後は本システムを複数の病院・診療所に広げ、また、Webお薬手帳の開発などシステムの機能拡張を図って患者が医療施設間でのIT連携の重要性を体感することが必要であるとともに、本システムの活用により社会が待ち望む地域医療連携を実現するには、施設を越えた医療スタッフ間の信頼関係の構築が重要である。

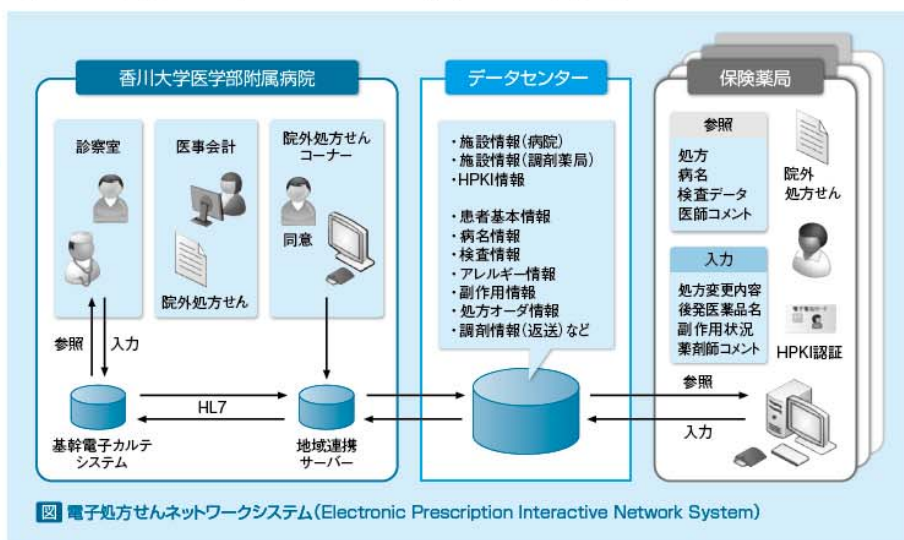


図 電子処方せんネットワークシステム(Electronic Prescription Interactive Network System)